

氏名（本籍）	並木秀俊（千葉県）
学位の種類	博士（文化財）
学位記番号	博美第238号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉金剛峯寺所蔵 国宝「仏涅槃図」の再現模写 〈論文〉金剛峯寺所蔵 国宝「仏涅槃図」の荘厳性に関する再現模写研究 —彩色と截金の表現技法を中心にして
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 宮廻正明
（論文第1副査）	〃 客員教授（〃） 有賀祥隆
（作品第1副査）	〃 教授（〃） 田淵俊夫
（副査）	〃 〃（〃） 木島隆康

（論文内容の要旨）

金剛峯寺所蔵国宝「仏涅槃図」（1086年）は画面右端に「応徳三年丙寅四月七日甲午奉寫己畢」の記載がされており、仏画の中で制作年代の確認できる数少ない作品のひとつである。平安彩色の代表される作品で色彩優美で保存状態が良好であり、本尊である釈迦如来の着衣には仏画史上最古の総截金が施され彩色と截金を研究する上で重要な作品である。

しかし、縹緗彩色における紫の退色と濃い部分や各尊像が着ている衣の文様の剥離に加え、画面の中央に横たわる釈迦如来の衣に施された截金は現在ほとんどが欠損している。これによって画面における重要な要素が損なわれている。このため画面全体の見え方が描かれた当時とは大きく異なる。優美で繊細な截金と豊麗な彩色を当時施されていた状態に戻し、大画面に描かれた彩色と截金の調和の取れている壮麗な荘厳芸術を実証するために、再現模写を通して本研究を行うことにした。

芸術性を回復する上で本図を構成する線描と彩色、截金の確証の持てる情報を得ることが大変重要な課題である。本図は昭和50～53年にかけて修理が行われ、その際にX線、赤外線などの科学的調査に加え、裏面からの撮影と表からの近接写真撮影がされ、現在でも調査は行われており高精細デジタル画像による撮影や蛍光X線による色料調査なども行われている。涅槃図では最古の作品であることから、美術学の研究も活発に行われ写真資料、美術史研究に表現技法の考察を加え情報をより確かなものとして本研究に反映させる。

本図のできる限りの調査を行い同時代の遺品を参考にしながら、本図の調査、線描、彩色、截金それをまとめた再現模写制作に分けて研究を進めていくことにする。

本研究を通じ再現模写を行い描かれた当時の情報を、細部まで再現し具現化することにより平安中期の荘厳芸術の一端を制作し表現することによって後世の仏画研究において考察の機会を与え、平安仏画の最高傑作とも称される本図の研究において一助となるはずである。また、本図における修理及び他の涅槃図の研究においても役立つと思われる。

また、極端なまでの截金の細さ、画面を劣化させるため光を直射できないなどのことから截金の存在感が低かったが、大画面に施された優美で繊細な截金を再現することにより奈良時代から伝えられている古典技法に対する認知度を高めることが期待できる。

事前研究

① 本図の調査

昭和50～53年の修理で撮影された裏面からの写真やX線写真、高精細デジタル画像の表面の写真資料に加え、LEDライトによる側光撮影、顔料の蛍光X線分析などの科学的な検査結果などを基に徹底的な目視による調査とそれらの資料をまとめ記録をとる。

※ 裏面からの写真は便宜上全て左右反転してある。

② 線描の研究

絹の裏から撮影された裏面写真、表からの写真、を確認しながらできる限り本図が描かれた当初の線描を起こしていく。表と裏の線描では合致しない箇所が多数あり、当時描きながら修正を加えていったと推察される。卓越した筆法で各尊像の表現を変えられているので、本図の線描の法則性を確認するためにいくつか試作を作成し研究する。

③ 彩色の研究

釈迦如来の枕の蓮弁から見て取れるように縹緗彩色の紫の退色と諧調の濃色の部分、白の輪郭線の剥離によって華やいだ印象とは異なるものとなっている。これらを再現するためX線、近接、裏面からの写真を基に試作を作成し研究を行う。

④ 截金の研究

残された截金からは仏画史上最古の総截金が施され、極細い截金と裁文で埋め尽くしていたことがわかる。裏面からの写真では截金の手順を解明し、X線写真では映し出された截金を描き起こす。試作にて習得した截金技法を用いて研究を行い再現模写に反映させる。

総 括

結論として現時点において一つの作例として提示し、本研究を行った結果今まで見ることはできなかった大画面における最古の総截金を再現することができた。截金と同様に荘厳するため貴重で鮮やかな岩絵具や染料を使用し、事実にもとづいて縹緗彩色や文様を描くことで画面の中央から端の細部に至るまで非常に精緻で色彩豊かな作品であり、本来持つ荘厳性が回復され本図における彩色や截金が重要な要素であったことが再認識できた。

欠損ではなく経年による磨耗であればX線や他の撮影で絵を構成するための細かな情報が映し出されていることが本研究によって確信できた。また、本図が最古の涅槃図でもあることから本研究は他の涅槃図の研究においても一助となるはずである。

美術学の見解や科学的調査結果に技術的な考察を加える複合的な研究を具現化できるのは、東京芸術大学だから可能でありこれからの研究の形態として提示していきたいと思う。